

平成25年度沖縄群島病害虫発生予報第1号(4月予報)

I 4月の気象予報

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)

	平均気温	降 水 量	日照時間
高い(多い)	50	40	30
平 年 並	30	30	30
低い(少ない)	20	30	40

(平成25年3月15日付沖縄気象台発表・沖縄地方1か月予報)

平年値

	平均気温(°C)	最高気温(°C)	最低気温(°C)	降水量(mm)	日照時間(h)
沖縄群島(那覇)	21.4	24.1	19.0	165.7	123.8

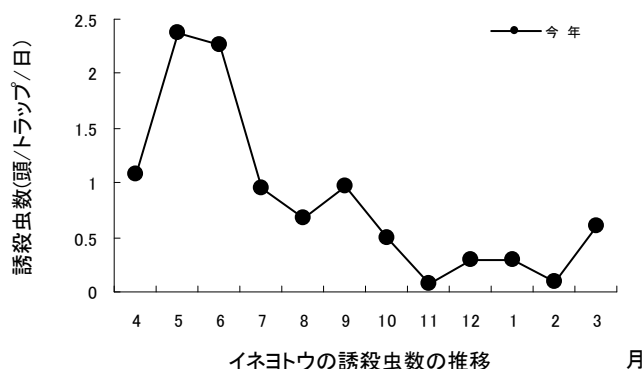
(沖縄気象台発表・統計期間1981～2010・資料年数30年)

II 4月の発生予報および防除上の注意事項

1 さとうきび

○ イネヨトウの防除対策

- a 3月下旬の調査の結果、新植夏植圃場における芯枯茎率は4.9%(前年5.5%)であった。
- b 3月のイネヨトウ合成性フェロモントラップによるトラップ当たり日当たり誘殺虫数は0.6頭であった。
- c 与那国島において、イネヨトウの被害が多発した際の誘殺虫数は2頭以上であった。



<防除上注意すべき事項>

- a ふ化した幼虫は、葉裏や葉鞘部から下部に移動した後、地上部の芽や根帯から食入し、生長点を加害して芯枯れを起こさせ茎を枯死させる。
- b 加害による芯枯れを防止し有効茎を確保するため、植付時・株出管理時および生育初期の防除を徹底する。
- c 圃場内外のイネ科雑草は発生源となるため除去する。
- d 植付時および株出管理時に土壌害虫の防除を兼ねた薬剤(粒剤)を施用する。
- e 平成24年度病害虫発生予察技術情報第7号参照(平成25年3月15日付)。

- カンショコバネナガカメムシ(ガイダー)の防除対策
 - a 3月下旬の調査の結果、茎当たり虫数は0.9頭(前年0.2頭、平年0.9頭)と平年並であった。
 - b 2～3月の気温に基づく、3月21日時点での防除適期は、沖縄本島および周辺諸島で平年より8日、南・北大東島で平年より7日早いと予想される。
 - c この時期に茎当たり虫数が20頭を超える地域は一斉防除をすることが望ましい。
 - d 薬剤防除の際は、周辺住宅地や隣接圃場に薬剤が飛散しないよう風向きに注意する。

防除適期予想日(3月21日現在)

地域別	防除適期	2.5齡期予想日		
		本年	平年	平年差
沖縄本島及び周辺諸島	4月7日～4月21日	4月14日	4月22日	8日早い
南・北大東島	4月4日～4月18日	4月11日	4月18日	7日早い

2 マンゴー

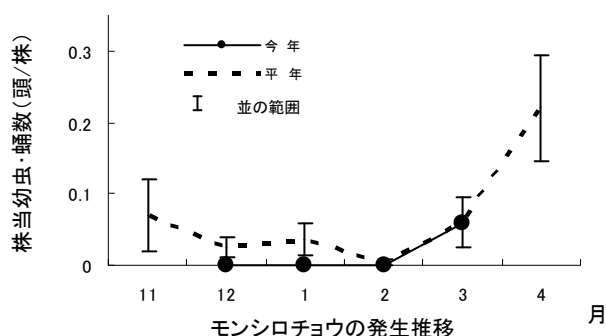
- チャノキイロアザミウマの防除対策
 - a 3月下旬の調査の結果、一部圃場で発生がみられた。
 - b 関係機関の情報によると、一部の圃場で被害果実が確認されている。
 - c 混合花の新葉や不用な新梢は本種の発生を助長するので、早い時期に摘葉する。
 - d 発生源となる施設内外の雑草を除去する。
 - e 薬剤防除を行う際は、受粉昆虫に影響のないよう巣箱等を圃場外に移動する。

3 キャベツ

(1) モンシロチョウ

発生程度 : 並
予報の根拠

3月下旬の調査の結果、株当たり幼虫・蛹数は0.1頭(平年0.1頭)と平年並であった。



<防除上注意すべき事項>

- a 圃場周辺のアブラナ科雑草の除去を徹底し、圃場管理に努める。
- b 低密度でも被害が大きいので、成虫が産卵に飛来したり、若齢幼虫をみつけ次第薬剤防除を行う。
- c 天敵が生存できるよう、選択性殺虫剤を優先的に使用する。
- d 若齢幼虫は葉裏にいるので、薬剤は葉裏に散布する。

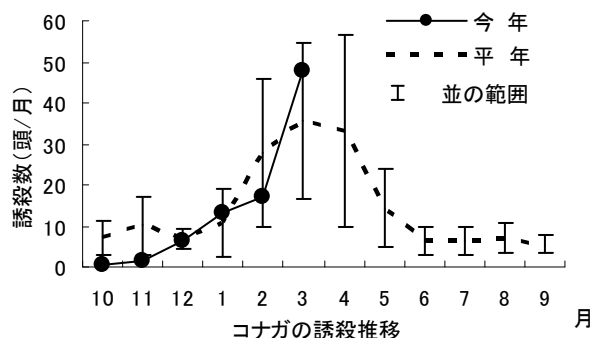
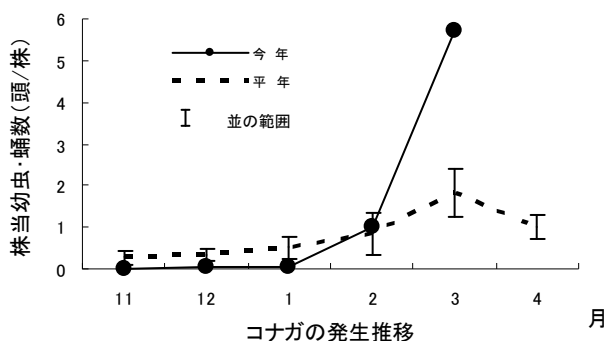
(2) コナガ

発生程度 : やや多

予報の根拠

a 3月下旬の調査の結果、株当たり幼虫・蛹数は5.7頭(前年0.5頭、平年1.8頭)と平年より多かった。

b 3月のフェロモントラップ当たり誘殺数は47.8頭(前年7.7頭、平年35.4頭)で平年並であった。



< 防除上注意すべき事項 >

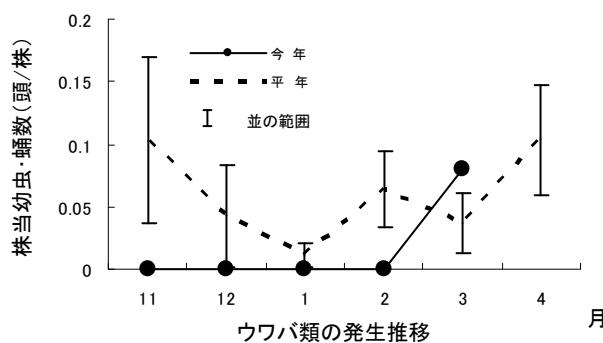
- a 圃場周辺のアブラナ科雑草の除去および収穫後の残渣処理を徹底し、圃場管理に努める。
- b 多発すると防除が困難になるので、低密度時に薬剤防除を行う。

(3) ウワバ類

発生程度 : やや多

予報の根拠

3月下旬の調査の結果、株当たり幼虫・蛹数は0.1頭(前年0.0頭、平年0.0頭)と平年よりやや多かった。



< 防除上注意すべき事項 >

- a 圃場周辺の雑草の除去を徹底し、圃場管理に努める。
- b 低密度でも被害が大きいため、成虫が産卵に飛来したり、若齢幼虫をみつけ次第薬剤防除を行う。
- c 天敵が生存できるよう、選択性殺虫剤を優先的に使用する。
- d 若齢幼虫は葉裏にいるので、薬剤は葉裏に散布する。

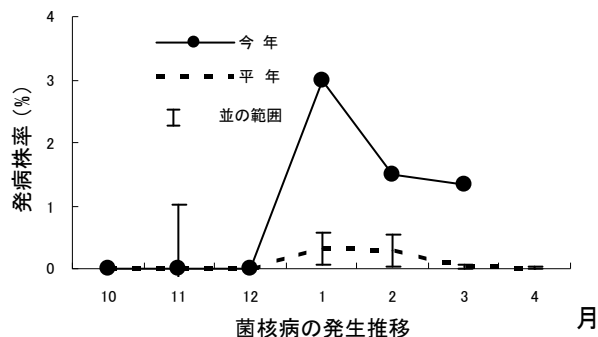
4 レタス

(1) 菌核病

発生程度 : 多

予報の根拠

3月下旬の調査の結果、発病株率は1.3% (前年0.0%、例年0.0%)と平年より高かった。



<防除上注意すべき事項>

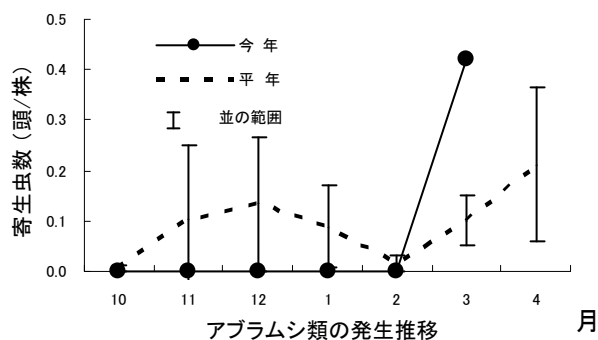
- 発病株は菌核を生じないうちに除去し、ビニール袋に入れるなどして密閉処理し、圃場外へ持ち出し処分する。
- 例年発生時期に当たるので、早期防除に努める。
- 平成24年度病害虫発生予報第11号(平成25年2月1日付)参照。

(2) アブラムシ類

発生程度 : 多

予報の根拠

3月下旬の調査の結果、株当たり虫数は0.42頭(前年0.02頭、平年0.10頭)と平年より多かった。



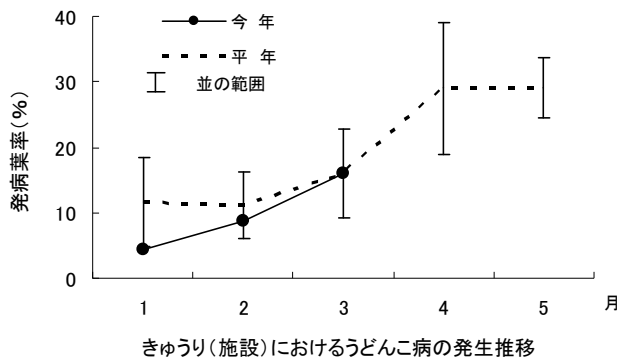
<防除上注意すべき事項>

- モザイク病の媒介虫である。
- 圃場周辺の雑草はアブラムシ類の発生源になるので除草を行う。

5 きゅうり(施設)

- (1) うどんこ病
発生程度 : 並
予報の根拠

3月下旬の調査の結果、発病葉率は16.0%(前年10.8%、平年16.0%)と平年並であった。



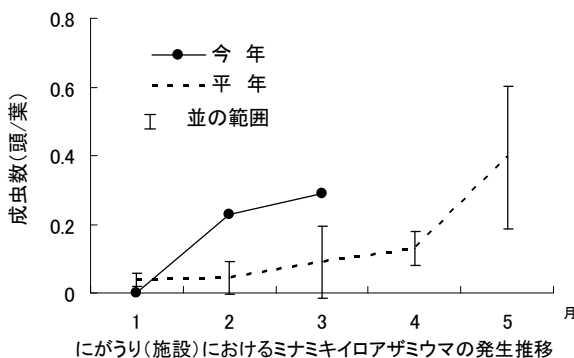
<防除上注意すべき事項>

老葉や病葉は発生源となるので、圃場内に放置せず、ビニール袋等に入れるなどして持ち出し処分し、透光通風を良くする。

6 ながうり(施設)

- (1) ミナキイロアザミウマ
発生程度 : やや多
予報の根拠

- a 3月下旬の調査結果、葉当たり成虫数は0.29頭(前年0.09頭、平年0.16頭)と平年よりやや多かった。
b 今後の気温上昇に伴い、本種の発生が増加することが予想される。



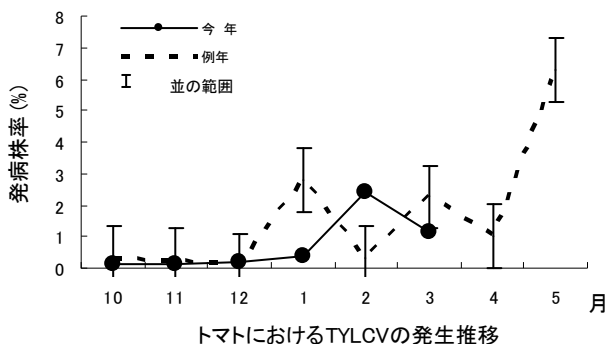
<防除上注意すべき事項>

- a 施設周辺の雑草は本種の発生源となるので、除草を行う。
b 施設開口部には目合いの細かい防虫ネットを展張し、本種の侵入を防止する。
c 摘心や摘葉後の残渣は、本種の発生源となるので、ビニール袋に入れるなどして密閉し、施設外に持ち出し処分する。

7 トマト

- (1) トマト黄化葉巻病
発生程度：並
予報の根拠

3月下旬の調査の結果、発病株率は1.1%（前年1.7%、例年2.3%）と例年並だった。

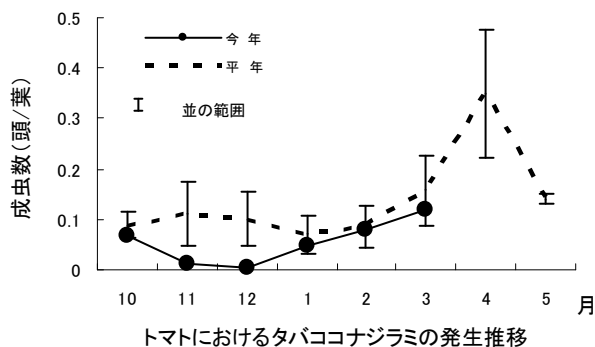


<防除上注意すべき事項>

- 発病株は感染源となるため、早急に抜き取る。抜き取った株は必ずビニール袋に入れるなどして密封し、圃場外へ持ち出し処分する。
- 施設内外の野良生えトマトは、本病の感染源および媒介虫であるタバコナジラミの発生源となるので、抜き取り密封処分する。
- 黄色粘着テープ等により、タバコナジラミの早期発見・早期防除に努める。
- タバコナジラミの薬剤防除を行う場合は、マルハナバチに影響の少ない薬剤を選定する。

- (2) タバコナジラミ
発生程度：並
予報の根拠

3月下旬の調査の結果、葉当たり成虫数は0.1頭（前年0.2頭、平年0.2頭）と平年並であった。



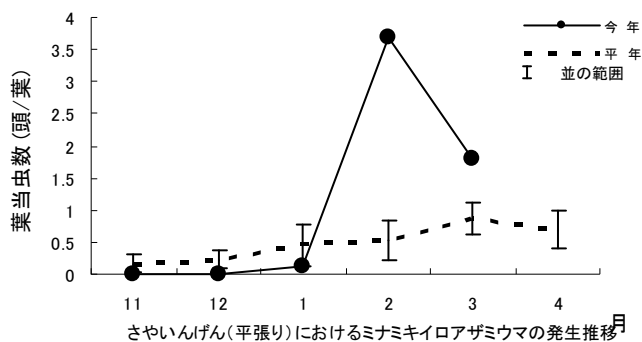
<防除上注意すべき事項>

- 本種はトマト黄化葉巻病を媒介する。
- 多くの雑草が発生源となりうるので、施設内外の雑草除去に努める。
- 施設開口部には0.6mm以下の目合いの細かい防虫ネットを展張し、本種の侵入を防止する。
- 黄色粘着テープ等により、タバコナジラミの早期発見・早期防除に努める。
- 幼虫は下位葉の葉裏に多いことに留意しながら薬剤散布を行う。
- 薬剤散布の際にはマルハナバチに影響の少ない薬剤を選定する。
- 平成24年度病害虫発生予察技術情報第6号(平成24年9月28日付)参照。

8 さやいんげん(平張り)

(1) ミナミキイロアザミウマ
発生程度 : 多
予報の根拠

- a 3月下旬の調査の結果、葉当たり虫数は1.8頭(前年0.6頭、平年0.9頭)と平年より多く、一部地域で多発生がみられた。
- b 気象予報によると向こう1か月は平年より気温が高いとされており、本種の発生が助長されると考えられる。



<防除上注意すべき事項>

- a 発生源となる圃場内外の雑草を除去する。
- b 薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。